

あいさつするということ

私は毎朝6時過ぎに家を出て、駐車場まで少し歩いて行きます。すると、ある男性とよくすれ違いますが、その方も出勤途中のようです。初めてすれ違ったときに、相手から「お早うございます。」と言われ、私も「お早うございます。」と返しました。それ以降、すれ違うたびに、お互いどちらからともなくあいさつを交わしています。いまだにその方のお名前は知らないし、それどころか、すれ違うときの数秒間しか会っていません。同じ街に住んでいる者としてのあいさつであるとともに、同じ時間、これから仕事に向かうという同じ立場で道を歩いている、そういう相手として見ていると言うことだと思います。

また、私は、毎朝、8時10分頃から25分の予鈴まで、通用門で皆さんが登校してくるのを待っています。この生徒はだいたい何分頃に登校する、この生徒達が来たらだいたい予鈴が鳴る。そんな楽しみがあります。毎朝、校門で「お早う」と声をかけていると、最初は、小さな声でつぶやくように「お早うございます。」と言っていた人が、はっきりとあいさつをしてくれるようになりました。私が、声をかけるタイミングを見計らっているときに、随分遠くから大きな声で「お早うございます！」とあいさつをしてくれる人もいます。朝から大変、爽やかな気分にしてもらっています。

2年生、3年生は、昨年、進路指導部長の二橋先生がおっしゃったことを覚えているでしょうか？ あいさつをするということは、相手の存在を認めていることです。校内で、知っている友人や先生とすれ違ったときはもちろんのこと、知らない方と出会ったときでも「こんにちは。」とあいさつをする、それは、「私はあなたの存在を認めていますよ。」という意思表示でもあるわけですね。

そんな「あいさつ」と対極にあるコミュニケーションの形が、顔をあわせず、声も交わさず、短い文で行う、SNSなどを通じたやり取りではないでしょうか。現代の社会において、SNSの果たす情報発信の役割が重要であることを否定するつもりは全くありません。しかし、「今これを読めば、相手はどう思うのか、いやな思いをするのではないか、傷つくのではないか。」そういう思いをいたさないままにメッセージを送ったり、書き込んだりしてしまいませんか。

人と人とが関わり合って生きていくこの社会で、相手の立場、相手の気持ちに思いを巡らせることを、大切にしてほしいと思います。

(令和元年8月 2学期始業式の式辞から)